

現状把握

中高連携の現状と真に求められるかたち

生徒の学びの連続性を確保するための中高連携の必要性が今、注目されている。中高連携の目的、難しさ、そして求められるかたちはどのようなものか、調査データと読者の声から考える。

学びの連続性が一層求められる時代に

変化の激しい社会を生きる上で必要な力を育成するため、すべての学校段階でアクティブ・ラーニングの導入などの教育改革が進む中、幼小、小中、中高、高大の学びの連携・接続がこれまで以上に重要になってきている。高校現場の教師も、学校段階ごとの特徴を踏まえた学びの連続性の確保について深い関心を持っているようだ。(P.2)

ベネッセ教育総合研究所が各学校段階の教師に、下の学校段階との連携・接続の状況（高校の場合であれば中学校との連携・接続）について聞いたところ、大半の教師が「とて

連携が進む一方でその中身に課題が

もうまくいっており、課題はない」「まあうまくいっており、課題は少ない」と現状を評価している(図1)。しかし、「あまりうまくいっておらず、課題がある」という評価も学校段階が上がるにつれて増加していることや、中学校教師が高校との交流に関して「盛んである」と感じている割合は低い(図2)ということから、中高連携において何らかの課題が存在していることがうかがえる。

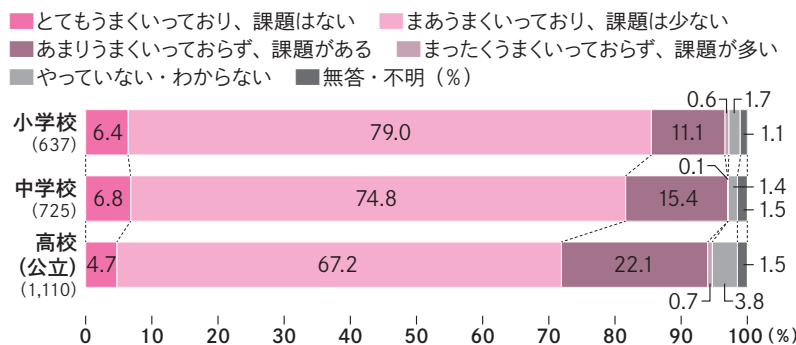
『VIEW21』高校版の読者の声やほかの調査データを見ていく中で、その課題が浮き彫りとなってきた。

図3を見ると、中学生の高校見学

や中学校からの生徒情報の共有は比較的多くの中学校・高校間で行われているが、互いの指導内容にまで踏み込んだ取り組みができているところはまだ少ないようだ。特に、高校教師が中学校の授業に乗り入れたり、授業を見学したりする機会は多くはない。そのようなところに課題を感じている声もある。(以下、太字は『VIEW21』高校版読者モニターの声)

- 高校教師は、高校以外の教育の実態について知らないのが現状。教科指導に注目しても、絶対評価がどのような影響を生徒に与えているのか、発展内容についての扱いはどの程度行われているのかなど、答えられないことが多い。(広島県・公立)
- 高校の教師は、学習面を中心に、

図1 下の学校段階との接続・連携の状況について (2016年)



※それぞれ下の学校段階との連携（高校の場合は中学校との連携）に関する評価を表す
出典/ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査」(2016年)

中学校でどのような内容をどの程度学んでいるのかを、もっと知る必要がある。
(埼玉県・公立)

● 中高間での学習の積み上げ、体系化が難しい。
(愛知県・公立)

● 中学校での学びの実態についてよく知らない。
(神奈川県・公立)

様々な違いの壁を乗り越え 6年間の学びをつなぐ

指導内容に踏み込んだ連携が進まない理由として、そもそも中高が連携して教科指導などについて学び合うための時間が取れないといったこととのほかに、中学校との指導観の違いや、その違いを認め合い、ともに考える姿勢が不足していることなどを挙げる高校教師も少なくない。

● 中高連携の研修会を行うが、「指導方法」について議論がかみ合わない。「指導内容」を話し合う場合も、高校側は「中学校段階でここまで定着をさせてほしい」などと学力不足の原因を中学校での指導に探しがちだ。ただ、それは大学との関係で高校が置かれる立場と同じだ。生徒

のためになる中高連携のあり方を模索したいというのが本心だ。
(鹿児島県・公立)

● 中学校と高校は別世界と言ってもよい。それでも中学校と高校の違いを認め合い、よい部分を取り入れることができれば、高校の指導の質は上がっていくと思う。
(岡山県・公立)

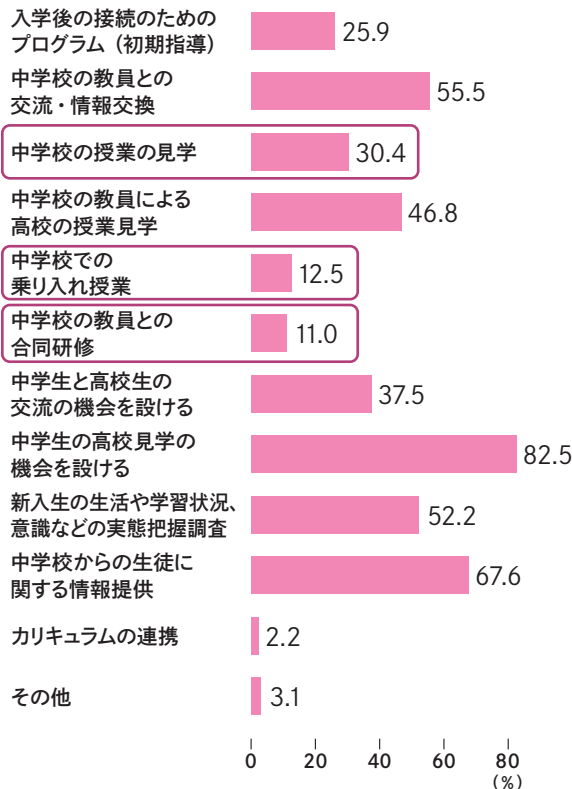
まずは、中高の違いを認識し、認め合うことから、中高連携は始まるのではないだろうか。様々な違いの壁を乗り越え、ともに生徒を育てていくことから生まれる価値は大きいはずだ。

● 学力と生徒指導に関してスムーズな連携が行われ、地域で子どもを育てる意識が醸成できることに大きな価値がある。
(北海道・公立)

● 生徒が1人の人間として成長するために、生徒に寄り添った連続性のある指導が必要だ。
(広島県・公立)

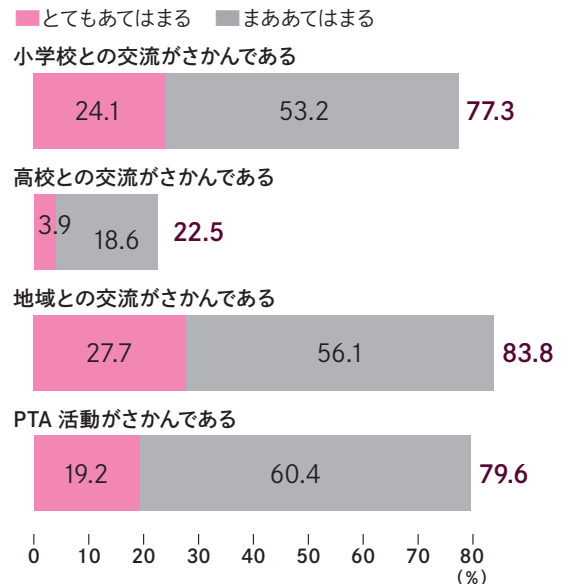
次ページからは、試行錯誤を経ながらも、学びと指導の連続性を深める中高連携の取り組みを実践している事例を紹介する。

図3 高校における中学校との連携・接続状況 (2016年)



出典/ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査」(2016年)

図2 中学校の学校段階を超えた連携・接続状況 (2016年)



出典/ベネッセ教育総合研究所「第6回学習指導基本調査」(2016年)